

座談会

大学と地域の 交流が 新時代の 後継者教育の 扉を開く

実践力のある学生を
酪農産業に送り出すために

司会 明けましておめでとうございます。酪農学園大学・同短期大学部では昨年2月、釧路管内浜中町と酪農を核に相互連携を深める「地域総合交流協定」を結びました。この協定は大学が持つ多様な機能や研究データを地域の課題解決に活用してもらう一方、同町からは学生の実践教育の場（農家実習）や研究材料の協力を受けるなど、相互連携を進めてお互いに発展していくこうとするものです。その取り組みの一つとして、昨年4月から浜中町と十勝管内鹿追町で「酪農実践学コース」の農家派遣実習がスタートしました。このコースは4年間の大学生活の中で2年前期と3年後期の1年間は酪農現場に出向き、生産者から酪農に対する考え方や生活の実態、技術などをじかに学ぶことを特徴としており、酪農産業に実践力のある学生を送り出すことを目的としています。

そこで本日は、2年前期の農家実習を終えた酪農実践学コースの第1期生5人に集まってもらい、参加の動機や4カ月の農家実習を終えての感想、この経験を将来にどう生かそうと考えているのかなどの話を聞きながら、大学と地域の交流や後継者教育について考えていきたいと思います。

最初に酪農実践学コースに参加した動機などを交えて、自己紹介をお願いします。

上島 私は神奈川県平塚市の出身ですが、少し山の方に入ったら酪農家や畑作農家も点在しています。両親ともに公務員で、農業に全く関係のない環境で

地域酪農の発展にどうアプローチするか

特
II

●ゲスト（発言順）

上島 優子さん
(酪農学園大学酪農学部酪農学科2年、鹿追町で実習)

山根 憲太さん
(酪農学園大学酪農学部酪農学科2年、浜中町で実習)

三浦 裕美さん
(酪農学園大学酪農学部酪農学科2年、浜中町で実習)

長恒 泰裕さん
(酪農学園大学酪農学部酪農学科2年、鹿追町で実習)

庄司 隆さん
(酪農学園大学酪農学部酪農学科2年、鹿追町で実習)

●司会

新名 正勝さん
(酪農学園大学酪農学部酪農学科 教授)

*文中敬称略(酪農学園本館第3会議室で収録)



自分たちが体験した農家実習を通して、大学と地域の交流の大切さやメリットについて話し合った

育ってただけに、農業の魅力やその陰にある厳しさなどは全く分かりません。本当の意味での農業の魅力や厳しさなどを体験したいと思い、酪農実践学コースに参加しました。将来は酪農にかかわる仕事がしたいのですが、実際に自分で酪農がしたいのか、農業団体・企業に就職したいのかは、まだ心の整理がついていません。だから、農家や農協の人たちと接することで、自分の将来を見詰めて形にしていきたいと思って参加しました。

山根 私は広島県広島市出身です。母は公務員ですが、将来、酪農経営がやりたくて酪農学園大学に入学しました。入学後、酪農実践学コースがあることを聞き、すぐに参加しようと思いました。新規就農はすごく難しいと聞いていましたが、農家で実習や経験を積み重ねることで自分も将来、酪農経営ができるかもしれないと思ったのです。今回は農家の生活や酪農の仕事を体験するために参加しました。

三浦 東京都杉並区の出身で、父はサラリーマン、母は専業主婦です。母の実家では農業をやっているようですが、私自身は農業にかかわったことは全くなく、酪農に関する知識は何もない状態で酪農学園大学に入学しました。酪農の知識がないくせに、



「大変な苦労をして受け入れてくれる酪農家や関係機関に大学として何をお返しできるのかが重要」と語る司会の新名正勝教授

牛はなぜか大好きなんです。だから、酪農の作業や知識をもっと身に付けたいと思って酪農実践学コースに参加しました。将来は酪農にかかる仕事を就きたいと思っており、最終的には酪農の仕事をしたいと考えています。

司会 ここまで3人は非農家の出身で、酪農に対するあこがれや牛が好きだということでこのコースに参加してきたようですね。では、酪農後継者でもある庄司君と長恒君はどうですか。

庄司 出身地は三重県松阪市です。大学入学前は、技術的なことは実家で経験を積めばよいと思っていたが、経験を裏付ける知識は大学でなければ学べないと思って酪農学園大学に入学しました。将来、実家の酪農を継ぐにしてもしっかりと体を動かしておくことの大切さを感じていたし、情報交換ができる一生の仲間を全国各地につくりたいと考えていました。今回の酪農実践学コースは、そのためのちょうど良い機会だと思って参加しました。

長恒 実家は鳥取県境にほど近い岡山県川上村で酪農を経営しています。私の大学での目標は座学とともに、酪農実習などでいろいろな農家の経営を見ておくことでした。だから、1年生のころから江別市近郊の酪農家でアルバイトという形で酪農実習を行っています。酪農に対する考え方、経営のやり方は農家によってさまざま、各農家の良いところを見つけて、それを将来の自分の経営に役立てたいと思っています。こうした考えの延長線上で酪農実践学コースに参加しました。

農家との生活を通して 経営主の考え方をしっかりと学ぶ

司会 やっぱり、酪農後継者の学生はかなり具体

的ですね。では、実際に農家実習を4カ月間経験してみてどのように感じましたか。

庄司 私がお世話になった酪農家では搾乳にすごく意識を置いていて、私の実家の搾乳感覚とは全く違いました。パーラーとパイプラインというシステムの違いもあると思いますが、特に衛生的な部分にはすごく気を配っていましたね。仕事の進め方やシステムは、経営者の姿勢や考え方で大きく左右されるものだと強く感じました。自分が見習うべき部分はたくさんあるなと実感させられました。

長恒 技術的な部分は分かりませんが、酪農に対する経営者の考え方という部分では大変勉強になり、充実した4カ月間でした。何が一番良かったかというと、鹿追町の農家の皆さんと知り合いになれたことです。獣医師や授精師の人たちからもいろいろな話を聞くことができました。私の場合、牧場までは通いだったのですが、農家の家族と一緒に生活をしていればもっと深く付き合えたし、もっといろいろな話ができるのに残念です。

三浦 農家実習に行く前は不安や焦りもありましたが、いざ実習に入り毎日仕事をしていると、思ったよりもあっという間に過ぎてしまったという感じですね。ほとんどの作業が初めてのことなので覚えることも多いし、毎日作業をクリアしていくことで精いっぱい、夜は疲れてぐっすりと寝ちゃっていました。それを考えると充実した4カ月だったと思います。最初は分からぬことが多過ぎて質問すらできない状態で、それが悔しくて自分で本を読んで勉強しました。私は農家の家族と一緒に生活していたので本なども貸していただき、分からないことは食事の時間などに聞いたりしていました。この実習に行かなかったら何にも分からなかつたんだなと思うと、行って本当に良かったです。

山根 私の場合、自分が想像していた実習とはだいぶ違いました。高校時代に酪農実習を行った時には共同作業などが多くて、みんなで和気あいあいといった楽しい雰囲気でしたが、今回は楽しいという感覚は全くありませんでした。でも、これが酪農家の現実の生活なんだと思いました。酪農だって楽しいことばかりあるわけではない。楽しさの裏には厳しさもある。現実問題として、経営者は経営をうまく回転させることを考えなければいけません。今回の実習では、酪農経営のそんな厳しさを感じさせ

てもらいました。

司会 経営主の考え方や仕事の進め方などはそれぞれの農家で全く違う。ただ、それぞれのやり方で各農家は見事な経営を実践してきている。

山根 私たちの頭の中では、酪農っていうと牧歌的でゆったりと仕事をしているイメージがありますが、現実はそうではない。牧場の立地条件や労働力、頭数規模などによってさまざまな経営や考え方があり、各農家は置かれた条件の中でそれ各自の戦略を持って経営を行っている。もちろん、仕事だからとの作業も真剣だし、楽しいことばかりではないという現実を垣間見た4カ月間でした。新規就農を目指す人たちは酪農が好きで情熱もあるが、今回、自分はそれだけの情熱を持っているのかを考えさせられました。

司会 まだ結論を出す必要はない。たった4カ月で酪農のすべてが分かるわけがないからね。

長恒 そういう意味では酪農の勉強だけではなく、人と人とのコミュニケーションの取り方、これから自分が社会に出て行く上で大切なことも学んだような気がします。酪農の技術や知識だけではなく、人間的にも成長できたと思います。

上島 技術や知識だけなら大学でも学べます。大学には先生や仲間はいるけど、現実の経営や農家の生活まで学び取ることはできません。つまり、大学では牛は飼っているけど農家経営ではないのです。実際に酪農家に実習に入らないと農家の生活は分からぬし、本当の農家の気持ちも分からぬ。実習というのは、そうした部分を学ぶためにあると思いますが、浅い部分なら大学2年次の夏休みに実施している委託実習で学べるでしょう。この酪農実践学コースでは、その先にある農家や町の人たちとの交流を通して、一生付き合える人間関係が生まれます。だからこそ、町の酪農の歴史や課題なども知りたいと思ったし、真剣に学ぶ気持ちにもなったんだと思います。

司会 4カ月というのは短いようで長いよね。皆さんに充実していたので短く感じたかも知れませんが、最初の1~2週間は慣れるのに大変だったと思います。その時期を乗り越えて、農家や地域の人たちと心を打ち解け合って信頼関係を築き、最後には強いきづなで結ばれた。皆さんの人生の中で大きな財産になったものだと思います。



「技術や知識だけなら大学で学べるが、農家の経営や生活は実際に酪農家に実習に入らないと分からない」と語る上島優子さん

大学では決して学べない 地域の人たちとの交流・さずな

司会 具体的に農家の人たちとはどのような話をしたのですか。

長恒 私の行った牧場では搾乳牛が230頭いて、これからもどんどん搾ることを目標にしていました。それまでは共進会にも積極的に出品し、良い牛をそろえることに熱心でしたが、8年前にフリーストール牛舎にしてからは方向転換をして搾りに徹するようになったようです。年間2,000t出荷という目標を立て、その目標を達成するにはお金や時間も必要だけど、それを覚悟して辛抱強くチャレンジしていました。先ほども話に出ましたが、経営主の考え方や仕事のやり方はそれぞれ違うのですが、勉強になることが多い。すべてを自分の経営に取り入れることはできませんが、自分の中でうまく整理して将来の経営に生かしたいと思いました。

三浦 私の実習先の近所には、父親は大規模経営を目指していて、息子は家族経営規模の経営をやりたいと親子で意見が合わない酪農家もいました。家族経営でも酪農って難しいものだなと感じました。

司会 農家にはいろいろな考え方があるわけだね。それを大学の講義で一般論で聞くのではなく、実際に真剣に考えている農家と触れ合えたということに意味があるよね。

庄司 私がよく言われたのは「人は牛を世話するが、人がした以上のことを牛はしてくれない」ということです。予想よりもマイナスになることは多々あるが、予想よりもプラスになることはほとんどない。つまり、どれだけ自分の牛に対して誠心誠意、自分の体を動かせるかということが大切だと



「酪農経営も楽しさの裏には厳しさがある。自分の酪農に懸ける本気さを考えさせられた4ヶ月間だった」と語る山根憲太さん

強く言われましたね。

三浦 私の実習先の酪農家は、家族労働でやっていける飼養頭数で頑張っていきたいという考えでした。出荷乳量を増やすよりも生活を大事にした経営を行っていましたね。

司会 後継者の2人にとっては、それぞれの経営主の考え方を肌で感じ取れたことは大きな収穫だね。これから酪農について深く考えようとする3人には、その入り口を大きく開いてくれる地域の人たちとの交流や情報もたくさん入手できたと思います。

上島 私は6月の鹿追町共進会で牛を引かせてもらいました。それがきっかけとなって、農家や地域の人たちとものすごく仲良くなりました。また、鹿追町には酪農学園大学の卒業生も多いので、畜産業界で働く卒業生もたくさん紹介してもらいました。

庄司 私も共進会に連れて行ってもらってから友達がたくさんできました。また、牛の見方や牛の引き方なども教えていただきました。9月下旬に早来町で開かれた北海道ホルスタインナショナルショウに見学に行きましたが、出品者の家族のように親しくしてもらってうれしかった。本当にさまざまな人の出会いがあり、これから酪農をやっていく上で大きな励みになりました。

長恒 私も鹿追町共進会と十勝共進会に出させてもらいました。共進会では会場に泊まり込みになるので、いろいろな人といろいろな話をしたし、貴重なアドバイスもたくさんしてもらいましたね。鹿追町の酪農家と、私の地元の人たちとの交流も生まれました。

司会 浜中町の方はどうですか。

山根 仕事中はお互いに忙しいのであまり話す機会はなかったですが、農協や普及センターなどでは

さまざまな情報を教えてもらいましたね。

三浦 親方が「浜中グリーン・ツーリズム研究会」に入っていて、その交流会や地域のお花見、運動会などに参加させていただきました。共進会ではデーリイプリンセスもやらせていただいたの。そのおかげで顔と名前は地域の人に覚えてもらいました。

司会 大学で酪農産業全体を支える後継者教育をする場合、大学だけの講義・実習よりも生産現場に積極的に足を運び、学生が農家生活を体験したり、農家と交流することは必要ですね。

上島 大学の友達では酪農後継者は1人しかいなかつたし、大学の中だけでは農協職員や普及員などと知り合えるチャンスも少ないのでしょうからね。

庄司 酪農現場の人たちは、現実的に大学に対してシビアな意見を持っている人が多いですよ。大学がこうした取り組みを積極的に行っていくことで、現場の人が酪農学園大学を評価すると思いますね。

酪農や牛乳をアピールして 将来は酪農産業に貢献したい

司会 皆さん貴重な経験をしてきましたが、この経験を将来にどのように生かしたいですか。

上島 今、飲用牛乳の消費が減っているじゃないですか。だから、酪農とか牛乳をもっとアピールしていきたいし、少しでも多くの人に酪農に関心を持ってもらいたいですね。実際、私の先輩も酪農学科の卒業なのにホームセンターに就職してしまいました。それは個人の自由だけど、せっかく酪農を学んだのだから酪農産業に就職してほしいですよね。そして、できればまた農家実習に行きたいですね。私が共進会で引いた牛の分娩にも立ち会いたいし、来年の鹿追町共進会も来いといわれています。せっかく築い

「私は“牛が好きなんだ”という初心を忘れないで、将来は酪農にかかる仕事をしたい」と語る三浦裕美さん



た農家や地域の人たちとの交流を断ち切らないようにしていきたいと思います。

山根 将来、自分の農場を持ちたいと考えるようになりました。何も経験しないで大学を卒業して新規就農を目指していたら、酪農経営というものをもっと古く考えていたと思います。酪農家になるためには技術や知識のほかにも、経営に対する姿勢や考え方、ポリシーなども大切なことが農家生活を体験して実感できました。次のステップを本気で考えるための良い機会になったと思います。

三浦 私の地元の東京では、酪農のことを理解している人はほとんどないので、酪農現場の現状を両親に伝えられただけでも良かったと思っています。また、友達や母校（高校）の先生たちにも酪農現場の現状を説明していきたいし、少しでも酪農や牛乳に興味を持ってもらいたいですね。将来のことはまだ考えられませんが「自分は牛が好きなんだ」という初心を忘れないで、将来は酪農にかかわる仕事に就けたらいいなと考えています。

長恒 この4カ月間で学んだことを自分の中にとどめずに、いろいろな人に話ををしていきたいですね。例えば、家族とか、地元の酪農後継者とかに…。それだけ自分が得たものは大きく、自分が話すことでも地元が活性化されたらいいなと思います。勉強や実習、そして遊びに一生懸命に取り組んで、すべてが自分のプラスになるように視野を広げていきたい。そして、これからも酪農に対する気持ちだけは大切にして頑張りたいと思います。

庄司 実習前だったら口先でいくらでも夢は語れましたが、今は深く考えるようになりました。今までの自分だったら言い訳をしていたことも、今は自分で反すして消化することができるようにな



「酪農の勉強だけではなく、これから自分が社会に出て行く上で大切なことも学んだような気がする」と語る長恒泰裕さん

酪農ジャーナル 2006. 1

「実習前だったら口先でいくらでも夢は語れたが、今は自分で深く考えるようになった」と語る庄司睦さん



りました。だから、自分の将来についてもじっくりと考えるようになりましたね。

司会 みんな言葉が重くなつたな。深く考えるよ

うになつたので、自分の発言にも責任を持つようになつた。それは農家実習の成果かもしれない。新しい目標が生まれた人、目標がより具体化した人もいました。大学生活はまだ2年半もあるので、じっくりと考えていけばよいと思います。また、視点を変えてより広く見詰め直すことも必要かと思います。

物事のかかわりというのはどれほど正論であっても「ギブアンドテイク」の関係でなければ続かない

と思います。農家実習も同じで、大変な苦労をして受け入れてくれる酪農家や関係機関に大学として何をお返しできるのかが重要だと思います。その答えとして、一つは地域の後継者に大学の集中講義を開放して後継者教育の一環とすること。もう一つは、酪農産業に実践力のある後継者を送り出すことが、実は地域社会を守り育てる上でも不可欠なことで共通の目的だということ。そして三つ目は、このようなつながりを契機に地域が大学の頭脳集団を有効に活用することです。置かれた立場は異なりますが、大学と地域はニーズを共有しており、同時に多くの可能性を秘めていると考えます。

最後に、本農家実習を実施するに当たって多大なご協力をいただいた受け入れ農家の皆さん、これを支援してくださった関係機関の皆さんに心からお礼を申し上げます。集中講義や遠隔授業、巡回指導などを含めてまだ解決しなければならない多くの課題がありますが、酪農学園大学のスタッフ全員で順次対応しながらより有効なシステムにしていきたいと考えています。今後ともご支援、ご協力をお願いして座談会を終わりたいと思います。

